

# 女性が男性から接近される際に許容できる距離 — 一定型発達者の男女と自閉症スペクトラム障害男性の回答から —

佐竹真次

## Female Maximum Tolerance for Male Proximity: An Analysis of a Questionnaire Filled Out by Typically Developing Females/Males and by Males with Autism Spectrum Disorders

Shinji SATAKE

### Summary

The author conducted a questionnaire survey to find out people's idea of the closest tolerable approach of a male to a female, i. e. the shortest male-female distance acceptable to women. The respondents were categorized into three groups: 1) typically developing females (TD females) who were about 20 years old; 2) TD males who were about 20 years old; and 3) males with autism spectrum disorders (ASD males). The question was repeated for each of seven age groups, one of which the "approaching male" was supposed to belong to. The average of Group 1 ranged from 0.2m for a familiar male infant to 1.3m for a familiar middle-aged male, and from 0.4m for an unfamiliar male infant to 2.5m for an unfamiliar middle-aged male. The average of Group 2 ranged from 0.3m for a familiar male infant to 1.6m for a familiar elderly male, and from 1.0m for an unfamiliar male infant to 2.9m for an unfamiliar middle-aged male. In general, the distance was longer in answers given by males than in those by females, and for unfamiliar males than for familiar ones. In addition, the older the "approaching male" got, the longer the distance got, though it peaked in middle age and showed a small decrease in old age. On the other hand, there was a remarkable difference among Group 3 individuals. Their estimated distance was too short, too long, independent of familiarity, or unrelated to the age group of the "approaching male." In light of these findings, the author discussed ASD males' difficulties in figuring out appropriate interpersonal distances and suggested a way to solve this problem through effective instruction.

**Key words :** Interpersonal distance, Personal space, Autism spectrum disorder, Typical development, Age group

### 問題と目的

人は一人ひとりパーソナル・スペースと呼ばれる一定の空間を持っている。パーソナル・スパー

スは、我々の周りを取り囲む目に見えない境界で仕切られた領域である。パーソナル・スペースは多くの研究者によって各々に定義されているが<sup>1,2,3)</sup>、鈴木<sup>4)</sup>はこれらをまとめて「他者の存在に

---

山形県立保健医療大学作業療法学科  
〒990-2212 山形県山形市上柳 260  
Department of Occupational Therapy,  
Yamagata Prefectural University of Health Sciences  
260 Kamiyanagi, Yamagata, 990-2212, Japan

(受付日 2014. 12. 26, 受理日 2015. 2. 4)

より何らかの情緒的反応を引き起こすような身体をとりまく領域」と定義している。一般に、自分のパーソナル・スペースの中に望ましくない他者が侵入すると不快感や緊張が生じるが、親密な者同士の間ではパーソナル・スペースへの他者の侵入が快感や喜びを生む場合もある。対人関係を円滑に営むために人はこの空間を上手に利用しているとされる<sup>5,6)</sup>。

パーソナル・スペースは「距離」という客観的な指標を用いて測定することが可能であるが<sup>7)</sup>, Hall<sup>8)</sup>は人がもっている対人距離を、密接距離(0.45m以下:きわめて親しい間柄にある者同士が使用する距離)、個体距離(0.45m~1.2m:2人が協力すれば身体の接触ができ、プライベートな交渉のときに使用される距離)、社会的距離(1.2m~3.6m:身体の接触ができなくなり、フォーマルなやりとりの際に使用される距離)、公衆距離(3.6m以上:講演などの際に使用され、個人的な交渉の持てない距離)の4つに分類している。ただし、個人の対人距離の決定には、文化差<sup>9,10)</sup>、経済的要因<sup>11)</sup>、学歴<sup>12)</sup>、性別<sup>13,14)</sup>、年齢<sup>12)</sup>、性格特性や親しさ<sup>14)</sup>、外見的特徴<sup>12)</sup>、感情状態<sup>15)</sup>、社会的地位<sup>11,13,14)</sup>など、さまざまな変数が関与している。

一般的な大学生を被験者とした八重澤・吉田<sup>15)</sup>、鈴木<sup>4)</sup>、Sawada<sup>16)</sup>によれば、被験者の緊張の主観的評定値(不安、緊張、見えの大きさ)は他者の接近開始から緩やかな単調増加を示すとされる。その後、気づまり、目をそらしたいと感じる地点に至る。八重澤・吉田<sup>15)</sup>によれば、女子学生が男子学生から接近された場合に気づまりと感じる距離は、直視されながらで約2.8m、非直視で約2.1m、目をそらしたいと感じる距離は、直視で約1.3m、非直視で約0.7mであるとされる。また、渋谷<sup>5)</sup>によれば、目標の人物に向かって接近して行き、それ以上近づきたくないと思った位置で立ち止まるという接近実験では、男性が既知の女性に向かって立ち止まる距離が0.74m、未知の女性への距離が1.68m、女性が既知の男性に向かって立ち止まる距離が1.39m、未知の男性への距離が1.47mであった。

このように、大学生の男女の間でも、接近する場合、接近される場合、「気づまり」、「目をそらしたい」、「それ以上近づきたくない」といった条件

により対人距離は微妙に異なるが、非直視よりも直視の方が、既知よりも未知の方が距離が長くなるようである。また、その距離は、Hall<sup>8)</sup>の個体距離と社会的距離の中(0.45m~3.6m)にほぼ収まると考えられる。

上記の結果は被験者の主観的評定によるものであるが、一方で、他者の接近に対する被験者の生理的反応はこれとは異なる変化を示すという。心拍数、瞬目数、呼吸数を指標とした研究<sup>15,17)</sup>によると、男子学生の接近開始後女子学生の心拍数、瞬目数、呼吸数はともにしばらくは減少し、気づまりと感じる約2.8m~2.0mの地点で急激に増加する。つまり、主観的評定値は、「他者の接近に従い不安や緊張も当然上昇するだろう」という被験者の推論に規定されると考えられ、他者の接近開始から緩やかな単調増加を示すのに対し、生理的反応は、被験者の感じる直接的な強い情動に関連すると考えられ、対人距離の境界近辺で急激な増加を示すとされる<sup>15)</sup>。

以上のように、人は社会的文脈と穏やかな情動によって規定される主観的評定と直接的な強い情動に関連する生理的反応によって対人距離を設定し、対人関係を調整するために効率的に利用していると考えられる。

さらに、対人距離の発達の変化について、Heshka & Nelson<sup>18)</sup>は、子どもは成長するに従い自立的になるように期待されるため、依存的行動を抑制して対人距離を伸ばしていき、最も独立性を要求される40歳頃で対人距離は最大となり、その後、身体的不都合から他者に依存せざるを得なくなる老年期において再び縮小するとしている。小学校3年生、5年生、中学校2年生、大学生を対象に調査した青野<sup>19)</sup>によれば、異性ペアの対人距離は思春期(中2)に最大となっている。池上・喜多<sup>20)</sup>は、対人距離は中年>老人>子どもの順に小さくなるという知見を得ており、Heshka & Nelson<sup>18)</sup>の結論に近い。このように、対人距離はお互いの年齢段階によっても大きく変化することが知られている。このような年齢相応の適切な対人距離などについては、多くの人は自然に学んだり想像したりして学習していくと考えられている<sup>21)</sup>。

ところで、近年自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder, 以下ASD)者において、知的能力は高いが社会に適応することが困難な事例と

非行事例との関連性が注目されている。藤川ら<sup>22)</sup>によると、ASD 者の非行事例の中では強制わいせつ等の性非行が 43.8% と半数近くを占める。しかし、そのほとんどは悪意をもってなされたものではなく、むしろ ASD の「対人接近型」としての特異性と関連したものであるとの説明がなされている。

ASD 者はその社会的認知機能の低さ<sup>23, 24, 25)</sup>や情動的な予測の失敗<sup>26)</sup>などから、人との距離情報や人の表情等の非言語的情報を手掛かりに他者の心理を読み取り判断することが困難であり、また自分の行動や言語が他者に与える影響を想像することが難しく、本来自然に学んでいくはずの社会的ルールが未学習・誤学習のままとなる可能性がある<sup>27)</sup>とされる。

とくに重要な社会的ルールの一つである、異性に不快感を与えないための異性に対する対人距離に関しても、上記の理由で、ASD 者は思春期・青年期になっても自分の身体的形態や機能および期待される社会的役割・振舞いが年齢相応に変化していることに気づかず、幼児期に許容されていた異性への対人距離や接触行動をそのまま維持しようとする可能性がある。また逆に、異性との関わりのトラブル等を体験した場合、その後は異性に対して不自然に大きな対人距離を設定し維持するようになる可能性もある。結果的に、異性への接近に失敗し、それが大きな苛立ちをもたらすことにより、いっそう異性に対する対人距離を逸脱するような行為に走ってしまうことも考えられる。

これまでになされた ASD 者の対人距離についての研究は極めて少数であり<sup>7)</sup>、それらは 4 歳から 10 歳までの ASD 児の大人に対する対人距離の測定、および臨床的介入による適切な対人距離の獲得・安定的維持を目的としたものであった<sup>27, 28, 29, 30, 31, 32)</sup>。これらを総括して、北・稲垣・軍司・細川<sup>7)</sup>は、ASD 児の対人距離の特性を以下のようにまとめた。①二者間（対象児と成人）では短い対人距離を示す、②知的能力が低い場合、対人距離が短くなりやすい、③成人による働きかけが対人距離を縮めやすい、④対人距離帯域を変化させることは少ない、⑤心理・教育的介入によって対人距離の変動は減少する可能性がある。

しかし、青年・成人になった ASD 者が、自分の年齢に応じた、異性に対する対人距離をどのよう

に把握しているかという研究は見当たらない。このような研究から実証的な結果が得られれば、ASD 児・者に対して、児童期から大人になるまで、その年齢に応じた異性に対する適切な対人距離について指導することが容易になるとともに、思春期・青年期になると自分の身体的形態や機能および期待される社会的役割・振舞いが年齢相応に変化することに気づかせやすくなるものと考えられる。

以上のことから、本研究では、質問紙を用いた投影法により、① 20 歳前後の女性の、男性が接近しても許容できる対人距離（女性にとっての男性接近許容距離）、② 20 歳前後の男性が推測する、女性にとっての男性接近許容距離、③ ASD の青年男性が推測する、女性にとっての男性接近許容距離を、女性に接近すると仮想する男性の知人・非知人別および年齢ごとに明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 対象者

定型発達 (Typically Developed, 以下 TD) 女性 163 名 (平均 18.8 歳, SD 1.4), TD 男性 103 名 (平均 19.1 歳, SD 2.0), 精神科医師によって高機能自閉症あるいはアスペルガー障害との診断歴のある ASD 男性 7 名。

TD 者については、大学キャンパスにおいて学生に調査の趣旨を説明して任意の協力を仰ぎ、同意が得られた後その場でアンケート記入を依頼した。依頼者は協力者が記入中のアンケート用紙を覗かないように配慮した。

ASD 男性 A は生活年齢が 19 歳の会社員である。15 歳のときに実施した WISC-III 知能検査の FIQ は 88 であった。ASD 男性 B は生活年齢が 20 歳の会社員である。15 歳のときに実施した WISC-III 知能検査の FIQ は 95 であった。ASD 男性 C は生活年齢が 20 歳の大学生である。14 歳のときに実施した田中ビネー知能検査の IQ は 104 であった。ASD 男性 D は生活年齢が 21 歳でアルバイトをしている。18 歳のときに実施した WAIS-III 知能検査の FIQ は 114 であった。ASD 男性 E は生活年齢が 22 歳の会社員である。16 歳のときに実施した田中ビネー知能検査の IQ は 100 で

あった。ASD 男性 F は生活年齢が 42 歳の飲食店員である。30 歳のときに実施した田中ビネー知能検査の IQ は 91 であった。ASD 男性 G は生活年齢が 43 歳の会社員である。31 歳のときに実施した田中ビネー知能検査の IQ は 93 であった。

ASD 者については、発達障害に関する研修会や任意開催のミーティング等に度々出席する中で互いに知り合った当事者と保護者に、調査の趣旨を説明して協力を依頼し、同意を得てからアンケート記入をお願いした。依頼者は協力者が記入中のアンケート用紙を覗かないように配慮した。調査は、出席した研修会やミーティングの終了後の空き時間を利用して実施した。

**手続き**

**質問紙の作成** 対人距離の測定方法には、人形やシルエットや図入りの質問紙等を用いる投影法<sup>3, 33, 34</sup>と、現実接近者が被験者に歩いて近づく接近実験法<sup>35</sup>がある。本研究では、質問紙による投影法を用いた。すなわち、縦置き A4 サイズ用紙上に、接近目標である高さ 1.9cm の女性人物略画を長さ 17cm の水平線分の左端に描き、その水平線分を 0~10m に見立てて目盛を振った尺度を用意した。なお、尺度の最初の見立て 3m 分には見立て 10cm 刻みの目盛も振り比較的詳細にした。3m を超

えたところから 10m までの範囲については表記上の長さを圧縮し、1m 刻みの目盛のみを振った (図 1)。そのようにした理由は、八重澤・吉田<sup>15</sup>や渋谷<sup>9</sup>等の先行研究から、日常的に意識される対人距離はおおよそ 3m の内側に収まることが多く 3m を超えることは稀であるために、最初の 3m 分に比較的詳細に目盛を振ろうと考え、同時に、3m から 10m までの対人距離への言及も大雑把ながらも捉えようと意図したからである。

質問紙の中で女性に接近してくると想像される仮定の男性の年齢を以下のように設定した。①幼い男の子 (0~5 歳)、②小学生男児 (6~12 歳)、③中学生男子 (13~15 歳)、④高校生男子 (16~18 歳)、⑤青年男性 (19~39 歳)、⑥中年男性 (40~64 歳)、⑦熟年男性 (65 歳~)。また、その女性と仮定の男性との親密度を以下のように設定した。①顔見知り (知人) : 近所、学校、職場などの人、②見知らぬ人 (非知人) : これまでに会ったことのない人。

**対象者への教示** 質問紙に記載した文章によって、女性対象者には主観的な男性接近許容距離について問うた。男性対象者には女性の主観的な男性接近許容距離についての推測を問うた。

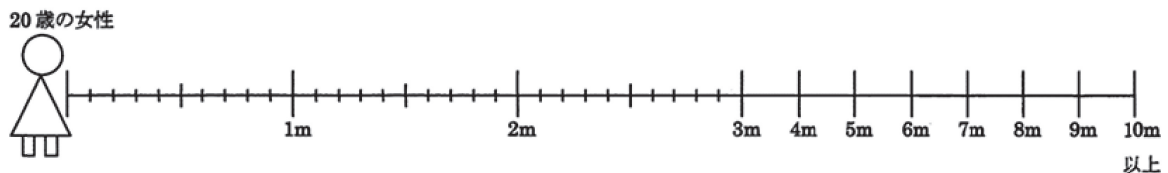
すなわち、女性対象者には「十分に広い場所で

十分に広い場所での他人との距離についてうかがいます。

20 歳ぐらいの女性にいろいろな年齢・関係のあなたが近づく場合、ここまでなら許容してもらえと思う一番近い距離はどの位置ですか。ひとつずつ選んで線上に丸を付けてください。(いろいろな年齢については、「もし自分が〇歳だったら」と想像してください。また顔見知りとは近所、学校、職場などの人のことです。)

**Q1.**

1) あなたが見知らぬ幼い男の子 (0~5 歳) だとしたら



2) あなたが顔見知りの幼い男の子 (0~5 歳) だとしたら

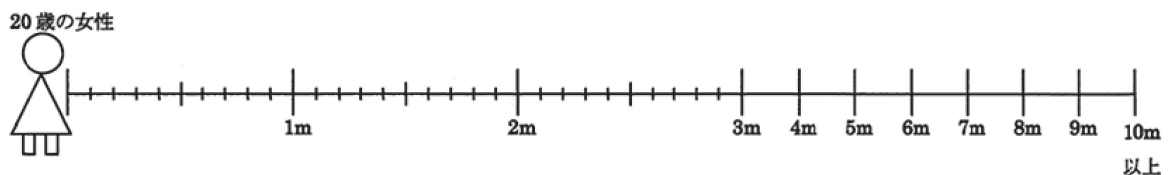


図 1 質問項目の例

(定型発達の男性が推測する、女性が各年代の男性から接近されるとしたら許容できる距離について)

の他人との距離についてうかがいます。次の人物があなたに近づいてきた場合、ここまでなら近づいてもよいと思う一番近い距離はどの位置ですか。ひとつずつ選んで線上に丸を付けてください。(見知らぬ人とは、これまでに会ったことのない人、顔見知りとは、近所、学校、職場などの人のことです。)」と依頼した。

男性対象者には「十分に広い場所での他人との距離についてうかがいます。20歳ぐらいの女性にいろいろな年齢・関係のあなたが近づく場合、ここまでなら許容してもらえらると思う一番近い距離はどの位置ですか。ひとつずつ選んで線上に丸を付けてください。(いろいろな年齢については、「もし自分が○歳だったら」と想像してください。また、見知らぬ人とはこれまでに会ったことのない人、顔見知りとは近所、学校、職場などの人のことです。)」と依頼した。

**データの処理** 統計処理には SPSS Statistics 17.0 を用いた。TD の男性と女性が回答した女性にとっての男性接近許容距離について、性別、仮想男性の知人・非知人の別、仮想男性の年齢段階の別に関する 3 元配置分散分析を行った。その後、仮想男性の各年齢段階における TD の男性と女性の間、仮想男性の知人と非知人の間で、2 つの独立したサンプルの  $t$  検定を行った。仮想男性の各年齢段階の間では Tukey の HSD により多重比較を行った。

**倫理的配慮** すべての対象者に、本研究以外の目的でデータが使用されることはないこと、個人が特定できる状態にならないように配慮すること、研究結果を関係の学会や学術雑誌等で発表させて頂くこと、データは厳重に管理することを説明し、了解を得た。また、本研究計画は、山形県立保健医療大学倫理委員会の承認を受けた。

## 結果

図 2 に TD 男性と TD 女性の回答した女性にとっての男性接近許容距離の平均値と標準偏差を示した。

20 歳前後の TD 女性 (以下、女性) が回答した男性接近許容距離は、相手の仮想男性 (以下、仮想男性) が知人の場合、男子幼児で 0.2m、小学生男児で 0.5m、中学生男子で 0.8m、高校生男子で

0.9m、成人男性で 1.0m、中年男性で 1.3m、熟年男性で 1.1m であり、中年男性でピークに至った。一方、仮想男性が見知らぬ人の場合、男子幼児で 0.4m、小学生男児で 0.9m、中学生男子で 1.4m、高校生男子で 1.8m、成人男性で 2.2m、中年男性で 2.5m、熟年男性で 2.0m であり、やはり中年男性でピークに至った。

また、20 歳前後の TD 男性が回答した、女性にとっての男性接近許容距離は、仮想男性が知人の場合、男子幼児で 0.3m、小学生男児で 0.7m、中学生男子で 0.9m、高校生男子で 1.1m、成人男性で 1.2m、中年男性で 1.5m であり、熟年男性で 1.6m とピークに至った。一方、仮想男性が見知らぬ人の場合、男子幼児で 1.0m、小学生男児で 1.5m、中学生男子で 1.8m、高校生男子で 2.0m、成人男性で 2.4m、中年男性で 2.9m であり、熟年男性で 2.5m であり、中年男性でピークに至った。

TD 男性と女性が回答した女性にとっての男性接近許容距離について、性別、知人・非知人、年齢段階に関する 3 元配置分散分析を行った結果、性別 ( $F(1, 3723) = 64.10, p < .001$ )、知人・非知人 ( $F(1, 3723) = 489.73, p < .001$ )、年齢段階 ( $F(6, 3723) = 110.88, p < .001$ ) の各々において主効果が認められた。また、性別と知人・非知人の間 ( $F(1, 3723) = 6.17, p < .05$ )、および知人・非知人と年齢段階の間 ( $F(6, 3723) = 8.01, p < .001$ ) において交互作用が認められた。

仮想男性が知人の場合、仮想男性のいずれの年齢段階においても、TD 男性が回答した女性にとっての男性接近許容距離の方が女性が回答したものよりも長く、 $t$  検定の結果、男子幼児 ( $t(170) = 3.33, p < .01$ )、小学生男児 ( $t(134) = 2.76, p < .01$ )、中学生男子 ( $t(190) = 2.01, p < .05$ )、高校生男子 ( $t(191) = 1.78, p < .05$ )、熟年男性 ( $t(137) = 2.74, p < .01$ ) の段階で有意な差がみられた。同様に、仮想男性が非知人の場合にも、仮想男性のいずれの年齢段階においても、TD 男性が回答した女性にとっての男性接近許容距離の方が女性が回答したものよりもわずかに長く、 $t$  検定の結果、男子幼児 ( $t(126) = 4.80, p < .001$ )、小学生男児 ( $t(128) = 4.39, p < .001$ )、中学生男子 ( $t(170) = 2.78, p < .01$ )、熟年男性 ( $t(171) =$

2. 16,  $p < .05$ ) の段階で有意な差がみられた。

さらに, TD 男性が回答した女性にとっての男性接近許容距離でも女性が回答したそれでも, 仮想男性のすべての年齢段階において, 知人男性と非知人男性との間には,  $t$  検定の結果有意な差が認められた ( $t = 3.36 \sim 8.17$ , いずれも  $p < .001$ )。

TD 男性・女性の回答の仮想男性が知人・非知人の場合を総合し, 仮想男性の各年齢段階間で女性にとっての男性接近許容距離を Tukey の HSD により多重比較した結果, 中学生男子と高校生男子の間, 成人男性と熟年男性の間以外のすべての年齢段階間において有意な差が認められた (高校生男子と成人男性の間, 中年男性と熟年男性の間は  $p < .01$  で, 他はいずれも  $p < .001$ )。

図 3 には TD 男性の回答した女性にとっての男性接近許容距離の平均値と ASD 男性の回答した女性にとっての男性接近許容距離の値を示した。

ASD 男性 A の回答では, 仮想男性が知人の場合, 女性にとっての男性接近許容距離は男子幼児から成人男性までの間で 0.5m 以下, 中年男性と熟年男性で 1.0m であった。仮想男性が見知らぬ人の場合は, 男子幼児, 小学生男児, 中年男性では TD 男性の回答の平均値に近いものの, 中学生男子, 高校生男子, 成人男性, 熟年男性では 1.0m 以下であった。

ASD 男性 B の回答では, 仮想男性が知人の場合, 女性にとっての男性接近許容距離は男子幼児で 0.5m であり, TD 男性の回答平均値に近いが, 小学生男児から熟年男性に至る各段階で TD 男性の回答平均値のほぼ 1 標準偏差の外に出ていた。仮想男性が見知らぬ人の場合も, 熟年男性で長くなっていること以外は, 知人の場合とほぼ同様の値であった。

ASD 男性 C の回答では, 仮想男性が知人の場合, 女性にとっての男性接近許容距離は男子幼児で 0.0m であるが, 小学生男児, 中学生男子, 高校生男子, 成人男性, 中年男性で TD 男性の回答平均値のほぼ 1 標準偏差程度となっていた。熟年男性で TD 男性の回答平均値程度となっていた。仮想男性が見知らぬ人の場合も, 男子幼児で 0.0m であるが, それ以降の年齢段階では TD 男性の回答平均値程度であった。

ASD 男性 D の回答では, 仮想男性が知人の場合, 女性にとっての男性接近許容距離がどの年齢

段階でもほぼ 0.1m であった。仮想男性が見知らぬ人の場合も, 男子幼児と小学生男児で 0.3m, 中学生男子で 0.4m, 高校生男子で 0.7m, 成人男性で 0.8m であり, TD 男性の回答平均値の 1 標準偏差程度であった。中年男性で 1.8m, 熟年男性で 1.7m であり, 1 標準偏差内であった。

ASD 男性 E の回答では, 仮想男性が知人の場合, 女性にとっての男性接近許容距離は男子幼児で 0.1m, 小学生男児で 0.4m, 中学生男子と高校生男子で 0.5m, 成人男性で 1.0m, 中年男性で 2.0m, 熟年男性で 1.5m であり, 小学生男児から高校生男子の範囲で TD 男性の回答平均値の 1 標準偏差程度であった。仮想男性が見知らぬ人の場合も, 男子幼児で 0.3m, 小学生男児と中学生男子で 0.6m, 高校生男子で 0.7m, 成人男性で 1.0m, 中年男性と熟年男性で 2.0m であり, 男子幼児から成人男性の範囲で, TD 男性の回答平均値の 1 標準偏差程度であった。

ASD 男性 F の回答では, 仮想男性が知人の場合, 女性にとっての男性接近許容距離は男子幼児で 0.5m, 小学生男児で 1.1m, 中学生男子で 0.6m, 高校生男子で 1.5m, 成人男性で 1.0m, 中年男性で 3.0m, 熟年男性で 4.0m であり, 小学生男児よりも中学生男子の方が短く, 高校生男子よりも成人男性の方が短いことの他に, 中年男性と熟年男性で極端に長いなど, 不自然な傾向がみられた。仮想男性が見知らぬ人の場合も, 男子幼児で 1.0m, 小学生男児で 2.0m, 中学生男子で 3.0m, 高校生男子で 5.0m, 成人男性で 6.0m, 中年男性で 8.0m, 熟年男性で 4.0m であり, 特に中学生男子から熟年男性の範囲で極端に長くなり, 中年男性でピークに至った。

ASD 男性 G の回答では, 仮想男性が知人の場合, 女性にとっての男性接近許容距離は男子幼児で 1.0m, 小学生男児で 2.0m, 中学生男子で 1.0m, 高校生男子で 2.0m, 成人男性で 1.0m, 中年男性で 1.0m, 熟年男性で 2.0m であり, 年齢段階とは無関係に変動していた。仮想男性が見知らぬ人の場合も, 男子幼児で 3.0m, 小学生男児と中学生男子で 2.0m, 高校生男子と成人男性で 1.0m, 中年男性と熟年男性で 2.0m であり, 男子幼児で極端に長い距離になるなど, やはり年齢段階とは無関係に変動していた。

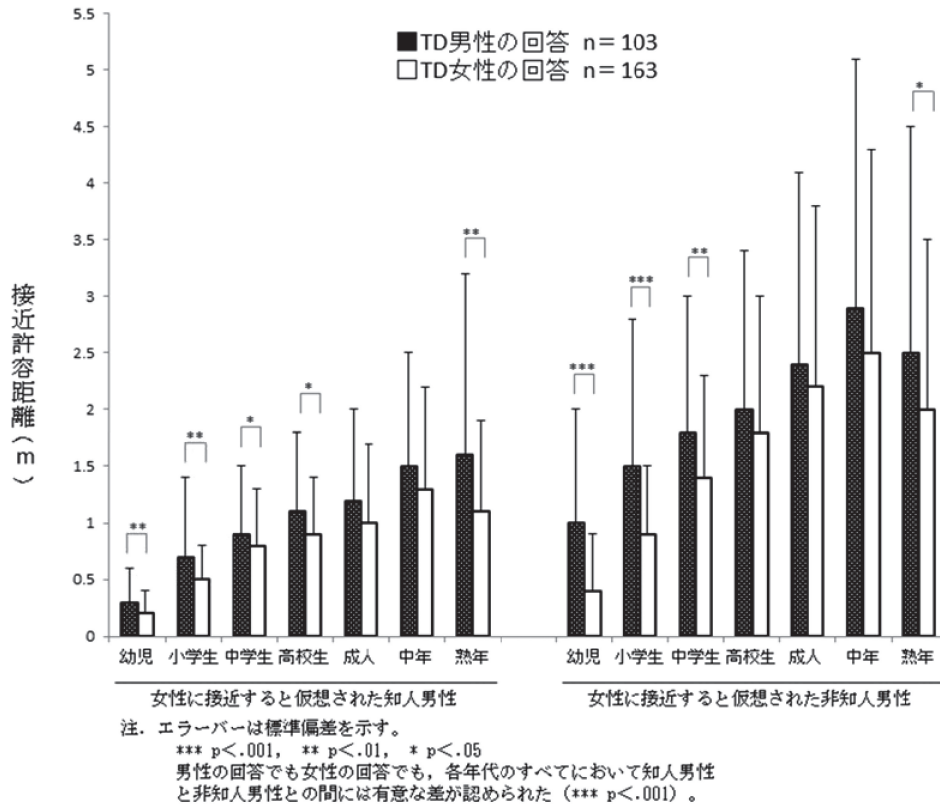


図2 定型発達男性が推測する女性にとっての男性接近許容距離および定型発達女性にとっての男性接近許容距離の平均

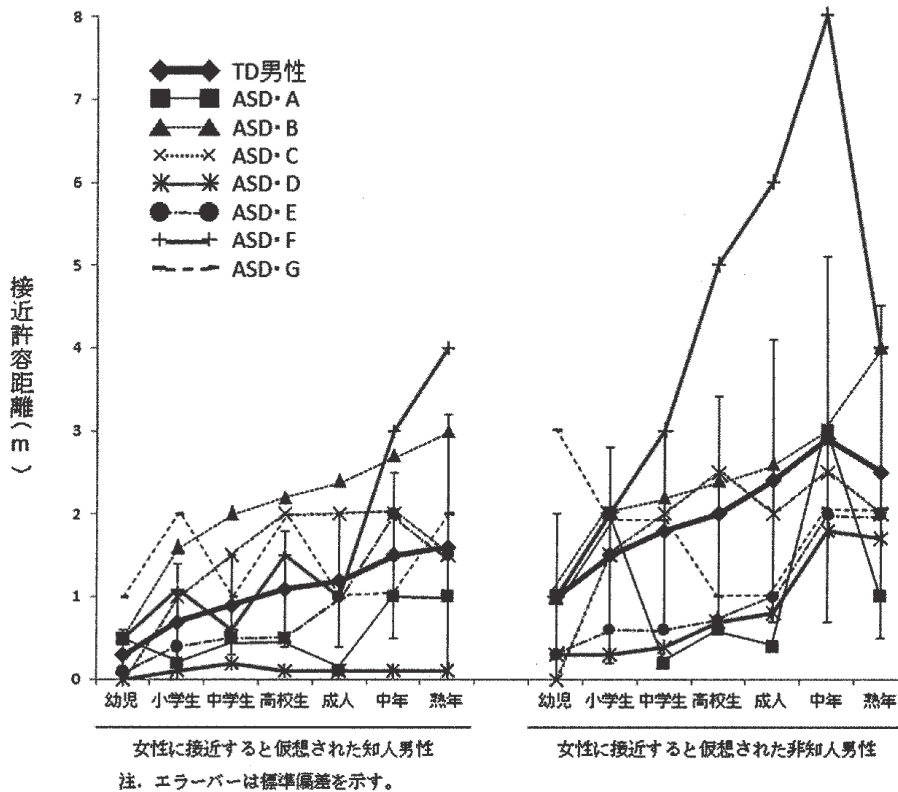


図3 定型発達の男性が推測する、女性が各年代の男性から接近されるとしたら許容できる距離の平均、および ASD の男性 7 名が推測するその距離

## 考察

### TD 者が捉える女性にとっての男性接近許容距離について

女性が回答した男性接近許容距離は、仮想男性が知人の場合、仮想男性の年齢段階に伴い 0.2m から 1.3m までと変化したが、大人の段階では 1.0m から 1.3m の範囲にあり、渋谷<sup>5)</sup>による、女性が既知の男性に向かって立ち止まる距離の 1.39m とほぼ一致していた。仮想男性が非知人の場合は、仮想男性の年齢段階に伴い 0.4m から 2.5m までと変化したが、大人の段階では 2.0m から 2.5m の範囲にあり、渋谷<sup>5)</sup>による、女性が未知の男性に向かって立ち止まる距離の 1.47m よりも長かった。しかし、八重澤・吉田<sup>15)</sup>による、女子学生が面識のない男子学生から接近された場合に気づきまりと感ずる距離である約 2.8m (直視)、約 2.1m (非直視) に近かった。

TD 男性が回答した、女性にとっての男性接近許容距離は、仮想男性が知人の場合、仮想男性の年齢段階に伴い 0.3m から 1.6m までと変化したが、大人の段階では 1.2m から 1.6m の範囲にあり、渋谷<sup>5)</sup>による、男性が既知の女性に向かって立ち止まる距離の 0.74m よりも長かった。仮想男性が非知人の場合は、仮想男性の年齢段階に伴い、1.0m から 2.9m までと変化したが、大人の段階では 2.4m から 2.9m の範囲にあり、渋谷<sup>5)</sup>による、男性が未知の女性に向かって立ち止まる距離の 1.68m よりも長かった。

女性の回答においても TD 男性の回答においても、仮想男性が知人の場合よりも非知人の場合の方が接近許容距離が長かった。それは、渋谷<sup>5)</sup>、池上・喜多<sup>20)</sup>の研究結果を支持するものであった。

仮想男性のいずれの年齢段階においても、TD 男性が回答した距離の方が女性が回答したものよりもわずかに長く、いくつかの年齢段階で有意な差が確認された。従来の研究でも、女性は男性よりもパーソナル・スペースが小さい、すなわち女性は男性よりも対人距離を短くすることを指摘するものが多い<sup>4, 20, 36, 37, 38, 39)</sup>。その理由としては、女性の方が接近されることによる気づきの程度が小さいこと<sup>4)</sup>、男性の方が親から離れて独立することを社会からより期待されること<sup>2, 20)</sup>が考えられている。

本研究では、女性にとっての男性接近許容距離が年齢段階が進むに伴って伸び、中年男性でピークとなる傾向がみられた。本研究のように 7 段階という細かい年齢段階で区切って調査した研究は少ないが、同様の結果は池上・喜多<sup>20)</sup>にもみられ、子どもや老人の社会的弱者性と中年の社会的地位の高さがその結果に影響しているとされる。また、年齢とともに対人距離が増大し 40 歳でピークとなることを見出した Heshka & Nelson<sup>18)</sup>は、その結果の理由として、子どもは成長するにつれて大人に対する依存性の抑制と自立性の訓練が期待されること、40 歳前後の人たちには最も独立性が要求されること、老人では身体的制約から依存性が再び増すことをあげている。

### ASD 者が捉える女性にとっての男性接近許容距離について

ASD 男性 A は、仮想男性が知人の場合も非知人の場合も、女性にとっての男性接近許容距離を -1 標準偏差以下で捉える年齢段階のあることを示した。

ASD 男性 B と C は、仮想男性が知人の場合、女性にとっての男性接近許容距離を +1 標準偏差以上で捉える年齢段階のあることを示したが、仮想男性が見知らぬ人の場合とは違いがなかった。

ASD 男性 D は、仮想男性が知人の場合も非知人の場合も、女性にとっての男性接近許容距離を 0m や -1 標準偏差以下で捉える年齢段階のあることを示した。D は児童向けのマンガ等を好み、ときどき地域の公園に行き小学校低学年児たちに話しかけていた。話題が合うからという理由であったが、その子どもたちの保護者からは警戒されることもあった。D の親は、子どもにはあまり近づかないようにという指導を D に行っている。

ASD 男性 E は、仮想男性が知人の場合も非知人の場合も、女性にとっての男性接近許容距離を男子幼児から男子高校生の範囲で -1 標準偏差程度で捉える傾向を示した。

ASD 男性 F は、仮想男性が知人の場合、女性にとっての男性接近許容距離について、仮想男性の年齢段階に対応しない不自然な値の昇降を示した。仮想男性が非知人の場合も、+2 標準偏差程度の距離で捉える年齢段階もみられた。

ASD 男性 G は、仮想男性が知人の場合も非知人の場合も、女性にとっての男性接近許容距離を、





え児童に対してではあっても、公園という広場で確かな理由がなく 1.5m 以内に接近することは望ましくなく、それ以上の長い距離を設けた方が安全であることを説明してみた。親からの指導も入ってはいるが、その後は公園等に行っても、顔見知りでない児童に接近したり話しかけたりすることは見られなくなった。

これまで、青年・成人になった ASD 者が、自分の年齢に応じた、異性に対する対人距離をどのように把握しているかという研究は見当たらなかった。このような実証的研究の結果を、混み合った電車内や座席の定められた映画館内等の各種の例外的場面に関する配慮を含めた上で対人距離教育の教材の作成のために活用すれば、ASD 児・者に対して、児童期から大人になるまでの年齢に応じた異性に対する適切な対人距離について指導することが容易になるとともに、思春期・青年期になると自分の身体的形態や機能および期待される社会的役割・振舞いが年齢相応に変化することに気づかせやすくなるものと考えられる。

### 謝辞

本研究の趣旨をご理解いただき、調査に快くご協力くださいました青年・成人の皆様、および保護者の皆様、また本研究の初期にデザインの検討やデータ収集等でご協力くださいました伊藤千鶴氏に心より感謝申し上げます。なお、本研究は 2011～2012 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（挑戦的萌芽研究）課題番号 23653320）の支援を受けました。

### 文献

- 1) Sommer R. 人間の空間（穂山貞登 訳）. 東京：鹿島出版会；1972. (Sommer R. Personal space: The behavioral basis of design. New Jersey: Prentice-Hall; 1969.)
- 2) Hayduk LA. Personal space: An evaluative and orienting overview. *Psychological Bulletin*. 1978; 85: 117-134.
- 3) Roger DE, Schalekamp EE. Body-buffer zone and violence: A cross-cultural study. *Journal of Social Psychology*. 1976; 98: 153-158.
- 4) 鈴木昌夫. パーソナル・スペースの基礎的研究 (I). *早稲田大学人間科学研究*. 1988; 1 (1): 23-29.
- 5) 渋谷昌三. パーソナル・スペースの形態に関する一考察. *山梨医科大学紀要*. 1985; 2: 41-49.
- 6) 渋谷昌三. 人と人との快適距離—パーソナル・スペースとは何か—. 東京：日本放送出版協会；1990.
- 7) 北 洋輔, 稲垣真澄, 軍司敦子, 細川 徹. Autism Spectrum Disorders 児の対人距離に関する研究動向. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*. 2009; 58 (1): 149-162.
- 8) Hall ET. *かくれた次元* (日高敏隆, 佐藤信行 訳). 東京：みすず書房；1970. (Hall ET. *The hidden dimension*. New York: Doubleday & Company Inc.; 1966.)
- 9) Watson OM, Graves TD. Quantitative research in proxemic behavior. *American Anthropologist*. 1966; 68: 971-985.
- 10) Remland MS, Jones TS, Brinkman H. Proxemic and haptic behavior in three European countries. *Journal of Nonverbal Behavior*. 1991; 15: 215-232.
- 11) Scherer SE. Proxemic behavior of primary school children as a function of their socioeconomic class and subculture. *Journal of Personality and Social Psychology*. 1974; 29: 800-805.
- 12) Jones SE, Aiello JR. Proxemic behavior of black and white first-, third-, and fifth-grade children. *Journal of Personality and Social Psychology*. 1973; 25: 21-27.
- 13) 青野篤子. 対人距離に及ぼす性と地位の影響：従属仮説の観点から. *社会心理学研究*. 2003; 19 (1): 51-58.
- 14) Gifford R. Projected interpersonal distance and orientation choices: Personality, sex, and social situation. *Social Psychology Quarterly*. 1982; 45 (3): 145-152.
- 15) 八重澤敏男, 吉田富二雄. 他者接近に対する生理・認知反応—生理指標・心理評定の多次元解析—. *心理学研究*. 1981; 52 (3): 166-172.
- 16) Sawada Y. Blood pressure and heart rate responses to an intrusion on personal space. *Japanese Psychological Research*. 2003; 45: 115-

- 121.
- 17) 野瀬 出, 雨森雅哉, 中尾彩子, 松尾千尋, 山岡 淳. パーソナルスペースへの侵入に対する心理・生理的反応—接近者の印象による影響—. 文京学院大学研究紀要. 2005; 7 (1) : 263-273.
- 18) Heshka S, Nelson Y. Interpersonal speaking distance as a function of age, sex, and relationship. *Sociometry*. 1972; 35: 491-498.
- 19) 青野篤子. 対人距離に関する発達的研究. 実験社会心理学研究. 1979; 19 (2) : 97-105.
- 20) 池上貴美子, 喜多由香理. 対人距離に関する性・年齢・魅力・親密度の要因の検討. 金沢大学教育学部紀要 (教育科学編). 2007; 56: 1-12.
- 21) 山本 彩. 自閉症スペクトラム障害特性を背景にもつ家庭内暴力や違法行為などの行動の問題に対する, 危機介入を含む包括的プログラムの開発. 北海道大学大学院教育学研究院紀要. 2013; 119: 197-218.
- 22) 藤川洋子, 阿曾直樹, 須藤 明. 広汎性発達障害事例についての実証的研究—調査及び処遇上の留意点—. 家裁調査官研究紀要. 2004; 1: 92-116.
- 23) Dawson G. 自閉症—その本態, 診断および治療 (野村東助, 清水康夫 訳). 東京: 日本文化科学社; 1994. (Dawson G. *Autism: nature, diagnosis, and treatment*. New York: The Guilford Press; 1989.)
- 24) Frith U. 自閉症の謎を解き明かす (富田真紀, 清水康夫 訳). 東京: 東京書籍; 1991. (Frith U. *Autism: explaining the enigma*. Oxford: Basil Blackwell Ltd; 1989.)
- 25) Rutter M. Cognitive deficits in the pathogenesis of autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*. 1983; 24: 513-531.
- 26) Baron-Cohen S, Leslie AN, Frith U. Does the autistic child have a “theory of mind”? *Cognition*. 1985; 21: 37-46.
- 27) Castell R. Psychical distance and visual attention as measures of social interaction between child and adult. In: Hutt SJ, Hutt C, editors. *Behaviour studies in psychiatry*. Oxford: Pergamon Press; 1970. p. 91-102.
- 28) 児玉昌久. 自閉症児の対人距離. 早稲田大学心理学年報. 1977; 11: 17-23.
- 29) 内田一成. 自閉症の社会的ストレス主因説の妥当性—脳波異常を伴わない自閉症児と脳波異常を伴う精神遅滞児の社会的行動に及ぼす対人刺激と対人距離の効果—. 児童精神医学とその近接領域. 1981; 22: 335-368.
- 30) Pedersen J, Livoir-Petersen MF, Schelde JTM. An ethological approach to autism: an analysis of visual behaviour and interpersonal contact in a child versus adult interaction. *Acta Psychiatrica Scandinavica*. 1989; 80: 346-355.
- 31) Pedersen J, Schelde T. Behavioral aspects of infantile autism: an ethological description. *European Child and Adolescent Psychiatry*. 1997; 6: 96-106.
- 32) Rogers AL, Fine HJ. Personal distance in play therapy with an autistic and a symbiotic psychotic child. *Psychotherapy: Theory, Research and Practice*. 1997; 14: 41-48.
- 33) Duke MP, Nowicki S. A new measure and social learning model for interpersonal distance. *Journal of Experimental Research in Personality*. 1972; 6: 119-132.
- 34) Pedersen DM. Development of a personal space measure. *Psychological Reports*. 1973; 32: 527-535.
- 35) Barnard WA, Bell PA. An unobtrusive apparatus for measuring interpersonal distance. *Journal of General Psychology*. 1982; 107: 85-90.
- 36) Sommer R. Studies in personal space. *Sociometry*. 1959; 22: 247-260.
- 37) Mehrabian A, Friar JT. Encoding of attitude by a seated communicator via posture and position cues. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*. 1969; 33: 330-336.
- 38) Hartnett JJ, Bailey G, Gibson FW. Jr. Personal space as influenced by sex and type of movement. *Journal of Psychology*. 1970; 76: 139-144.
- 39) Leibman M. The effects of sex and race norms on personal space. *Environment and Behavior*. 1970; 2: 208-246.
- 40) Frith U. *Autism: explaining the enigma-2nd edition*. Hoboken: Wiley Blackwell Pub; 2003.
- 41) Happé FGE. *Autism: an introduction to psychological theory*. London: UCL press; 1994.
- 42) Ozonoff S. Executive functions in autism. In:

Schopler E, Mesibov GB, editors. Learning and cognition in autism. New York: Plenum Publishing Corp; 1994.

## 要 旨

質問紙法により、①20歳前後の女性の、男性が接近しても許容できる対人距離（女性にとっての男性接近許容距離）、②20歳前後の男性が推測する、女性にとっての男性接近許容距離、③自閉症スペクトラム障害（ASD）の青年男性が推測する、女性にとっての男性接近許容距離を、女性に接近すると仮想する男性の年齢ごとに明らかにした。調査の結果、その距離の平均値は、①女性から見れば、仮想男性が知人の場合、男子幼児の0.2mから中年男性の1.3mまでの範囲にあり、仮想男性が見知らぬ人の場合、男子幼児の0.4mから中年男性の2.5mまでの範囲にあった。②男性から見れば、仮想男性が知人の場合、男子幼児で0.3mから熟年男性の1.6mまでの範囲にあり、仮想男性が見知らぬ人の場合、男子幼児の1.0mから中年男性の2.9mまでの範囲にあった。その距離は女性よりも男性の方で長く、知人よりも見知らぬ人の方で長く、また年齢段階が上がるにつれて長くなり、中年男性の段階で最大となって熟年男性の段階で少し短くなる傾向がみられた。③ASD男性の回答によれば、その距離は個人差が非常に大きく、短すぎるタイプ、長すぎるタイプ、知人・非知人を区別しないタイプ、仮想男性の年齢段階と無関係なタイプがみられた。以上を踏まえ、ASD児・者の対人距離の把握における困難とそれを解決するための教育の在り方について論じた。

キーワード：対人距離、パーソナル・スペース、自閉症スペクトラム障害、定型発達、年齢段階